第一章　溝の帯

1

ツンと鼻を刺すようなにおいがした。

少し湿り気が含まれている。大きな石をひっくり返したときに立ち昇るようなにおいだ。僕は反射的に身をかがめた。頭の奥がやたらにチカチカする。

ンモロモロモロモロモロ…。

遠くで太鼓を叩くような音がしたかと思うと、突然、地面が大きく揺れた。体が宙に跳ねた。あわてるな。僕は自分に言い聞かせながら、着地するや、両手を広げて地面に腹這いになった。

ギャアギャア喚(わめ)く鳥の声がする。顔を上げると、いつもはきれいな群れで飛んでるのに、やたらめったら、バラバラの方角に飛んでいくのが見えた。その空は真っ赤だ。

そう、時刻はちょうど夕暮れで、僕はお腹がすいてきたので、遊ぶのをやめて家に帰る途中だったんだ。でもあの真っ赤さは普通じゃない。毒々しいって言葉がピッタリくるような色合いだ。

ンモロゴロゴロゴゴゴゴゴ。

揺れはさらに激しくなってきた。僕がいる場所は、

ちょうど沢(さわ)のようになっていて、道が両側からせり出した崖に挟まれている。崖の上に目を向けると岩のかけらがパラパラと落ちてきた。

ここは危ない。危険すぎる。

あわてて周囲に目を走らせた。記憶ではたしかこの辺りにあったはずだ…あった！

20メートルほど離れた場所に大きな老木が立っている。その木はずっと以前に生きることをやめたのに、変わらずそこにいて、地上に露出した根っこが出っ張りになって、雨やどりするのにちょうどいい空間になっている。

僕は手で頭をかばいながら老木をめざして駆けた。途中でひとかかえもある岩が左脇をかすめて落ちてきた。ヒヤッとしたけど、無事に根っこの下にたどりついた。

揺れはまだ続いている。これ以上ひっくり返らないように、手頃な根を両手でつかんだ。

何かが落ちる音、転がっていく音が続いている。根っこの隙間(すきま)から、砂ぼこりが舞い込んでくる。

その時、悲鳴が聞こえた。逃げ惑ってる人たちが近くにいるんだ。視界が悪くて姿は見えないが、安全な場所が見つからないんだろう。

ざまあみろ、と僕は心の中で叫んだ。

あんな奴らは皆、岩や木の下敷きになってしまえばいいんだ。怖い思いをすればいいんだ。泣き叫んで命乞い

すればいいんだ。
何人かがこちらに駆けてきた。と、地面が突然裂け、彼らが飲み込まれた。僕はアッと叫んだ。

2

僕はそのまま、何人かを飲み込んだ地面の裂け目を凝視し続けていた。いま目にしたのは、ほんの目と鼻の先で実際に起こったことなのか、何度も自分自身に問いかけてみた。
これじゃ、まるで映画だ。
昨日、僕の通う小学校の体育館で、映画の上映会があった。ふだんなら上映する映画も、偉人伝のような教育映画か、動物たちが主人公で彼らが旅をするディズニーお得意の物語みたいなのが相場だ。でも今回はうちの小学校出身の映画監督の講演がセットということで、監督さん自身が作った〝怪獣映画〟が上映された。先生方は最初、上映するかどうか、ＰＴＡを交えてかなり揉(も)めたらしい。それでも最後は曲がりなりにも全員一致で上映を決定したのは、新興住宅地から通う子供が多い土地柄だったせいだろうと誰かが言ってたっけ。
監督さんはかなりのおじいちゃんだった。僕ら子供たちは、最近観た映画の話は聞けそうにないなとがっかり

してたんだけど、お話を聞いてるうちにぐんぐん引き込まれていった。

監督さんが仕事を始めたのは白黒映画の時代だったそうだ。当然ＣＧなんてない。若い頃は、脚本に書いてある突拍子もない話をどうやって撮影するか、とても苦労したらしい。でもいろんなアイデアや工夫で乗り切ってきたことで、どんな無茶な要求にも応えられる自信がついたそうだ。

とにかく監督さんのお話は抜群に面白かった。続いて上映された映画は古くさかったけど、作る人の気持ちで観たのですごく楽しかった。でも怪獣が登場するシーンでは、火山が噴火し、山裾の町が大きな地震に見舞われ、たくさんの人が地割れの中に落ちていった。とても怖かった。

ハッと我に返った。これは映画じゃない。落ちた人は痛かったはずだ。大怪我したはずだ。血が出たはずだ。いや死んだかもしれない…。

いつか地震はおさまっていた。まだ地面はわずかに震えてる。砂埃（すなぼこり）が少しずつ晴れてきた。さっき走ってきた道がぱっくりと真横に裂けている。それこそ怪獣の口のようだ。僕はぞっとした。

目の端で何か動いた。割れ目の縁（ふち）に誰かの手が見える。

ぎりぎりで掴(つか)まってる人がいるんだ。僕は考えるより先にダッシュしていた。10メートルを一息で走りきり、手をつかんだ。ぼくの半分ぐらいの身長の子供だ。ぐいっと引き上げた。

げっ、子供じゃない！　全身毛むくじゃらだ！チンパンジー？　僕は仰天して尻餅をついた。

3

なんで猿なんだ？　チンパンジーなんだ？

ぼくは尻餅をついたまま、助けたばかりの小猿から後ずさりした。はあはあ。息の乱れが治まらない。

ぼくはぎゅっと目を閉じて深呼吸をした。ゆっくりと十数えて、おそるおそる目を開いた。やっぱりいる。そこには怯(おび)えた顔できょろきょろしている小猿が確かにいた。いま流行(はやり)の家庭用ロボットじゃない、正真正銘の生き物だ。

動物園から逃げてきたんだろうか。地震で檻(おり)が壊れたので逃げ出したってことも十分考えられる。

小猿は、きぃっと鳴いて、ぼくの左腕にしがみついてきた。一瞬逃げようかと思ったけど、なんだか怯(おび)えてる姿がいじらしく見えたし、伝わってくる体温が妙にぼくの気持ちを落ち着かせる。こんなふうに誰かに抱きつか

れるのって、長いことなかったな。
ぼくは右手で小猿の頭をなでてやろうとした。
そのときになってやっと気がついた。今度こそ最大の驚きだ。
どうしてぼくの手は毛むくじゃらなんだ？
あわてて手のひらを裏返しにしたり表にしたりしてみた。それから肘(ひじ)を、肩を、両足を。
どこもかしこも薄茶色の毛で覆われている。ぼ、ぼくは猿の着ぐるみを着ていたのか？　しがみついてる小猿にかまわず、左手で右腕をつまんでみた。うぐっ。着ぐるみじゃないぞ。間違いなくぼくの皮膚だ。そんな馬鹿な。

どれぐらい時間が経ったろう。ぼくはずっとへたり込んだままだった。あちこちでまだ岩の転がる音がしている。
遠くからききぃーっと高い声が響いてきた。とたんに肩に乗っかってた小猿は声に呼ばれたように飛び降り、声のほうへ走っていった。
そこには声の主だろう、母親らしい大人の猿がいた。猿…いや猿というには、どこか違う気がする。全身が毛で覆(おお)われてはいるけれど、そんなに濃くはない。母親は小猿を抱きしめた。その表情にはどこか人間っぽさを感

じる。〝母猿〟と呼ぶのは失礼に当たるような、そんな雰囲気がある。

母親はぼくのほうに顔を向けた。表情には我が子を守ってくれたのかという感謝と、そして明らかに困っている様子が見て取れた。

そう、思い出した。ぼくは嫌われていた。

みんなはぼくを嫌いだし、ぼくもみんなが嫌いだったんだ。

4

それは思い出したくもないことばかりだ。ぼくはひどいイジメを受けたんだ。ぼくだけじゃない、母さんもだ。ぼくたち母子はリフジンなハクガイを受けたんだ。母さんはそう言ってた。

大好きだった父さんの悪口を言いふらし、ゴミのように捨てた連中なんか、映画に出てきた怪獣に踏みつぶされてしまえばいいんだ、滅んでしまえばいいんだ。ぼくはずっとそう思っていた。念じていたと言ってもいい。

小猿の母親はぼくに近づき、大きな木の実を地面に置いた。そして小猿を抱きかかえたまま、そそくさと木に登って、あっという間に姿を消した。

ぼくは木の実を見ながら、どうして小猿を助けたりしたんだろうと考えていた。

地震が起きてたくさんの悲鳴が聞こえたとき、これは神様の与えた罰だ、神様がぼくに代わって恨みを晴らしてくれてるんだって思った。でも実際に人が、いやあれも猿だったのかな、地面の裂け目に飲み込まれるのを見たとき、すごくイヤな気持ちになった。吐きそうだった。

ざまあみろと、心で叫んだのだってそうだ。そのときは本気だった。でもすごく後味が悪かった。ぼくが悪い怪獣になったみたいな気分だった。

とにかくぼくは助かった。この地震がどのくらいの被害を及ぼしたのかは分からない。震源地はどこだったんだろう。もっと大きな被害を受けた地域もあるんだろうか。

ぼくは立ち上がって、山から崩れ落ちた、背丈のゆうに三倍はある岩の間を縫うように歩きながら帰宅の途についた。

母さんが心配しているはずだ。早く帰ろう。

沢を抜け、峠を登った。夕陽が最後の光をぼくの背中に投げかけていた。

この峠からは三百六十度の風景を眺めることができた。

月の光が湖を照らしてるのがきれいだ。
その脇を南北に横たわる黒いギザギザが見える。誰も近づくことのできない〝溝の帯〟だ。
最後の森を抜けて、ようやく目指す山の麓に到着した。ここからすぐの中腹に、ぼくと母さんの住む洞穴(ほらあな)がある。
寒さに体が震えた。腕をさすったら、体を覆っている問題の毛のことを思い出した。
まあ今はどうでもいいや。早く家に帰って暖かいものにくるまろう。すべてはひと眠りしてからだ。